撰集抄

和書門
類 二〇六九二
號
函 一三
架 四
冊

内閣文庫
和書
類 二〇六九二
號
冊 四
函 二一〇
架 二三

釋家 七ノ二

内閣文庫
番號 和 20692
冊數 4 ( 1 )
函號 210 149

210-149

国立公文書館
National Archives of Japan

# 撰集抄第一目録


一 僧賀上人事
二 依祇園御詣有男女心事
三 有僧都西向欣然事
四 西行三位遁世事
五 宇津山僧女心事
六 深世住人不知法師世捨事
七 新院御墓讃別面事
八 行賀僧都耳切関縁事
九 一和僧都事
十 真蓮法眼事 者蓮院宮



浅草文庫


西行記

十一 播州平野僧正の事
十二 花林院永玄僧正の事
十三 雲林院説法聞塩の男の事
十四 慈恵大師の母尼女人擬法華の事

撰集抄第一目録畢

# 撰集抄

## 序

生死の長さ眠のまさめ醒て夢のごとくなれば。水の面の月と爽しかりし境の内のうぶすなを。ゆめ〳〵思入こゝろのまゝに妄念の心のこゝろ。ぢごくに生死の苦とすゝへどして。屠所に引つゞの歩に移れがごとくなれば。永思の者ふ。是とゝまるかたをもとめ方四十余年のあれをいとゝ。貴給素志やわらむ。ちられば同夏。乃うち花遊ふと。絶舊の異沈と。撰求事の事の。ことの葉と書集め。撰集抄と名付て。庭の右よ

西行記

至て一箇の知識に対まんとすれども巻の九品の浄土
に思ひ寄て十の一をもとめ難し。末の八十億劫に思ひそへ
て百が一をもとめ難し。抑凡夫の聖の眼を力て高貴
とかんずる心巻くの劣の利物なこそ侍なれ。さ
ま人倫に優に冥加ありつるさもとんかるは。巻毎に弗の
の字を書とて一字に一字ずつ侍るなり。



# 撰集抄巻一

## 一 増賀上人の事

慈恵大師門弟子

増賀上人と云人のすてかりありけるを
なりけりとする。道心おかくて天台山の根本中
堂に千夜籠て見と行給へども実の心
やはうなくて侍りけるを。人伊勢大神宮
に詣て侍りけるに。道の心
を発さんと思ひ給へしかばと。示現を蒙
給りて。折節て侍りけるを。名利と捨ずして侍る
まじ。捨てこそ捨ずして侍るなる。神宮にかたく食ぶ
ぬ。さらまほしく。記。なる物とぶめを。分入る者の給ひ

赤そぐりゐて下向し給ひしかりぎぬの思
とすして物よりるゝおもはせぬものいとゝさ
ぶらふてやすゝ云て。おかこみかん侍もとゝも。寒のいもは
くゝきはらばかりの者り。道くいはぬ白い云
山へのぼり。中程ひとりゐ。道者恵大師の清宝に入給
まゝ。三年相伝の相伝をうけ給ふ。ゝ同朋ゝ
うへ相ゝ見ぬ人も侍りかや。師遁の大師
ひそかに招入給。名利と捨給ふ。ゝ
の振舞給ふ。いや只威儀を正してゆふ名利とし
それ給へ。とゝ。いさゝか給ひ名利となゝく捨給
てなん後ぞ。こそ侍べられ。てゝ。そのゝ乃身や。



相ゝくゝして。立給給れば。大師を門の外に出給
てゆゝ。ゝ。ゝ。ゝ侍りて。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゝ。僧侶へ入給ふ。大和国長谷と云所ゝ
入給。智朗禅師の房のゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ

ふこと。名利の二ツのみなり。又墨染の形よりなを面つ。
会稽とも云ふべき詩人の面像せられ世俗ゆ
ひしのたりあり。歩い格格官と云ふあり。公家の
僧侶より別り三千は禅院より門ふんと思へること。
名利の二とはるれどもいとうたぐひなにと
よりて。唯藏止親より眼をとさしこ。法の王理と。平信
仰の人々ふられたりて。生死の海にとぶ
よひ。ぞうて。雖ども。離もんうはれ
ぞ世くと。強て思るれ。幸の設ふ法の信り。出
うあるよは。増賀上人の名利の思ひと面ぐてあり
捨ぬんぬ。ぞうれは。又伊勢太神宮

の。法眼ふ。ずんぷんうみてうぷ。ぷ。ぷを法れ信ふべき
や。貪はと凝の材をひきはひ。名利のとこやとなろ
ふ。ぷ。ぷ。川の涙よすぐれ。天照大神の清光よ
消ぬふ。そ。返てかれ。ぷ。ぷ。ぷ

の西住房のもとにおもむきていそぎおきさの沢に長て侍る
よ。気うとくさはがしくして。
もろもろのふるまひと思へばかりなほ欲しん
と御詞宣なりぬと思てが歌ゆゑばは可ゆかぬ。
くさぐ〻薬どころ様。すべてをあざにもろもろの花は世なり。よ
ひは月ひとり朋ふ死し。朋ふあり。そぐひ夕ふ白骨こ
なり。ほとをもむろ対あり。欲とを所〻表行り。元常物変
変。はれうとかへと世の中に思ひとぶ。てをろに
も。本世の長さ者を。欲ばりあん事ばかりかはを
思てやはり自知るとはく素ふをかくもいとず
して。西川のをうて行なく拾あつめて。如歌居ちり



りて。明暮念仏をぞ侍りあるばを。をとひとあ
らばりられいたがいさめよりんと。とすべしとおひて。
里に出〻物をとらつりぞもを侍る。只二心ふす念仏を申
侍るをれば。ちろ人をあれて。命をとけぐたよ
つをぞ侍りあるかくて日数をふれば書をやめ得
て。後世のをり侍りてどうくこうら人侍れば。あへて西
事をとをおりずつよく念仏をそをおりけばりのり。
何してう道いもうもべきるれば。うら人を極て侍る侍
つをぬ。さて侍女房の法はすべりばるべき様よに
ろうひ。世後をさ程の奥是ろう人送まり来れば。
自ずるをそで日数送り侍るばる程よ世人中隙

なりぬるかとおぼえて。慶命押え給ひ給ふ人。是はいかに。深窓や。
さく夜までと思ひ給ふ。さまの暗くして。懇
かうべをさしてをしまれ給ふの道に行
せる人の心の方はそこせてやうやうにて給ひ川に居
ゆらりてさらさらと流れ重なりあれは思て。
せ嘆ありけるべかりけるとりすべき是なりてこそ
ふ念仏志給へうといへばうなりいづくまでへ
き。一所よ住んとて。如ごとなりめと云て。内に入ぬ
しむ。ましたとなり住りて。同部会仏し給へり
まいり。切候やうすこ涙て。夜と残を老の袖をしぼ
られとやて。涙とゆづす人の心をおくく住りありがくて

二とせ程とすりけり。三月十四日の暁よ。是は世人通給
し人の西ふむさて産し給へ家を出給し重ねら
の産せうと人の心ざを拾すて眠をうこそして流
とりはへりおそるべく雲霞こくを集
て。往生人として法師とそ住りあり其歌とう所
面く。今の住とりの。ひ幸をゆよ。ずの住は涙石せさ
流て住り。ぬひしるく人よはにまんげをるうあが
ふねまでるまうるひすれ何でぞ涙の代
けうし。神仏よ祈でる。ぬかれくの祈でぬ思
ひよりひをかくぬまくく欲よ歌とそ人くぬ世し
かしくぬ世いとげしふりてゆうへぬのせたん人

なるそうぞうなりふしぎの神のことまりなり後の
と深く思ひ入侍りて悲しくおぼえ侍りしかばとんかいにおち
かりしまとまり拾さく素門の教をうけ給はんとて
でありがたくはべりはべらずや我もとこれのものいひ
のあるとあり給りあんしんせんせ中所とかの人給し
てあり生道心の寄ものを受べし神祇をうり
やともよりは世とばは拾ばとぶ口惜く侍りと
押えもん人乃殺人から殺人ありて中く侍りさ拾
の歌なとの出家遁世をんいぶくうれくてすく
財寶ふこそけるべきふ法師と思ふ一つ為る
物てあ後世のいとはすくなん事学ものべさ

く侍り市廛より侍らしく我頃はいとく昔乃社と侍
ふうれ事ふありてでいたのくく野山をくはまで
を求さうすはらびありて世をはまいされで
世生ふ懐ととげ侍ふもちろり和光利物
乃はんくを遊くを求侍りき中禅寺盧舎那久遠成
正覚三昧堂多宝如来大明神ふれり久を正覚
の如来雑類同塵しまをんあり
ぶけなく侍りあるを

三

あ僧市西向寄頼事

中法都乃内ふいげくの者もまれでさすへ
ありへ僧侍りから面より始てまとろかさ

まて宿をあさるに宿まする物もきず。遥
薦などうちさしけるに人の家は入て物とりのせけるを
見てかるんぜざへのいとをくてみいるに人の
見て柳の木の枝をもぬきてゆゝしく引かくれ用る
をさをばかりかばかりあるとられて命をさ
ゆる程の事いかりけるとかや或時人の家よび入
てをさをさして帷をぬぎたる僧の云
様法師恋をしてもをさ羅ばかりなるものの
人をうらみあれこそすべきいかにてうけをばすべき
なんど仮宿をすゝめられを給へ。但我身は
遥にもとをるまて。さ様のものの宿かりけ給まし



見ぬ人とかくしかるべきにはあらねどもこれを遥しまうふかりた
だ遥にもるべのもとて給へ。をさをさ時給へんそれをも
ぬさをさ給へ。をさをさして遥しのまへかりまをすべ
かりけるとてもとをさをさ給へ。思ひ給へとて霧
をもの者ぬ。かるくてあるり。拾ものも凡お
やくいとまず人の名さ物をもぬ。今日へるべぬ
まべ。ゆきあるとてらしずそ給へりとあはとく
さるまうはるまをもる。会仏中雲くうぐ誦ーて。
思入るさ海なまじ。ぬ。ぬ人のてをるれるく
さ海をそしけるを武蔵守殿と云。雲の給ふすり事り
給ふ。雲財面ーてぬのとうの給へべきぬはくつを要

の結ぶ花よと。恋よりすぐれたるものぞ。あさぐ
ろの花のさけるみ。春のをしみて。ながりぬ
風ふき吹くに。春の盛なるとも。あるとてをも。
みやいろみわさみをさりて。樒の花ぞ。
見へ。そはぬ。ものとて出ぬりぬ。
みちんぬ。あるとこんて。結ぶすとも。なんぢ。
ふ。ぬりうこそ。ふかく。えて。
ぬ。憂世よ。けうるくわぐ。ものあるを。
を。ぬ。やして。名利のいとまもなれば。
ぬ。をもくるまの。をとして。
波のありさまを。ふされうんぬ。の中。実よ。ぬ。

そへ。ぬ。昔の。喫茶とうを。一碗。
波と。ふくすとうりぬ。それ。
ふうてれ。けりやうん。波と。
ぬ。ぬ。ぬ。樒花として。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
すざめ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
てぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
を。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
う。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
の。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。

もせるに。未世のちまつ人なれば。仏詣でしんのあるべきや。
ちりぬかりてもてざるは。生死の苦に堕ぞう
しるべおそれは。食の人のぶりごとくなるひる。須
史ばかり待つとえてけりぬ。法師の法師傍
り。袈裟をかりぬ。をてぐさ。たちこの国をいで
げかりるべけるりぬんをぞうめわるず。彼の記しん平
の京。高山の色をとりて。世をれ世情を遂めて行ぞと
みるぬず。彼よ涙おちてけりき。哀悲しき歌ぞう
る。十二因縁輪廻のし。陽遊とく絶。二十六の流物
の縁縁よ不定。お源をとく輪廻のつより苦。後
源必ず無の苦。ぬぐひよ色綱をあぐ。

情のみぬ。武の父母とるり。武の所身となり。主君と
して見もぞし。後も貪とく。後生を出ず。往因の
酬不代をとりけるで。只一世の悲しかるひ。紅涙その
身とあく。彼と深く。我後の世の孫とをとず。
実よ。彼うるぬけるで。往事とをれ爰うし男人
はぞうれのけきい爰よるもあり。後。高遊と若の郷
かく。銀色だ。古の音ふ。ひきうず。仏石鏡り哭
し。顔回路よ先立。聖人とは悲とまぬりまず。上
代と紅と離生けるぞ。況や末世をや。我朋実法右
将軍ぬ少して教訓よ先立。京極大相国考く出
嬉よ哭し海りくぬんぬ。ぬ元浄方ぬ南て。千万く

根ぬ一分よみてあてに思食ありけめ。下方の寄ハ
共生死の家狭きはらる所乃郷うり。閑よ比和紙
思解て。頭の風の寄てど。肩乃寒乃喉ぢうた
よ。後の世の勤とまげまし給へとなる。

四

四位ふ位遁世事

七条乃里居。笑さ也給
家の法のまいてくぞ乃さびきまりさ海てぢり
ろに。て。拙氏殺。被と楽給て方をいまてかりを
ふなんめりぞ中ふ拙沖て所ふ所ひろ保給ち
女房の仲へ入乃ちひゆ給りまう遁事よ。
れさうなく　あまのこ海さろ　家のうちに　年合てすま

いせ行ものを　毎なりしそ　ふ作て　すむさなく
うすり寿　源乃伊勢ちん　られの井ハ　ほれうゆ乃
きてれて　林のあ動ふて　初せくふ　ちろうちりく
りれるは　なのむ新なく　うりてく　とまろ物ハは
花ずき　家なれ家り　ひまさも　ちなん
物ろりふ　鳴まりて　ちたびてそめ
と頼ぢりろと。家乃内の人ぞ。見をゆ給く。物よあ
りまと思られろすや。ぢろりぞさてそうるくをを
何すあふ給めぞ。ぬの。ちろうけちの。宮ふ給よ行く
世なて。四教もいまぐ不宮。被を行りとめう。海。あ
れよけうる素事をゆ給ぞん。ぬのうりぢもわ行ぞ行

ぞうんさられしも海老と思ひとりあげひさすず帝ろうに。
囲碁の二番ばかりをはしんぜ寿と見給へくはいよく
歌の道をもり給てぞ自ずから押切勿り書よとあ
つを捨てぬげらもるく海ざれ笑給へうぞは法華
おぞくも見て給ひてやうあぬとぞの給うけ給ひうぞ
ありうあ雅そえて給。扇をくひ給ひ人ともに給
ぞりけるおぞりがられ書ぞいとそうきるはふり給く。
物方ちぞ源ぞり給ちんぞ八の美さは。まにものべかる
く。詞ものくしがく。実ぞ書ぞ除寅及ま給。除
命給ぞ不法ぞとてぞ三遠のちまぞ中ぞの蹴ん。
書ぞ海寅ぞにそへざろはくるす。海く無給に

ぞ物なりぞはまぞひまぞりのぞりの花の光ぞ。
かすぐく善提の方ぞりくんぞんぞ長ぞよなりぞや。惟戒
及絶不敢遠今世後世為作冥途の無きこ
ちぞは戒法不敢遠のぞあそぞとくなれぞう
しまくく思ひとりぞく戒法の切法とぞくうん
と思給れど年経て。思ひまれものびく
て。海くとすぐ法ぞ給ぞ。ぞうにはは三法の戒ぞ海ぞう
く勤給ぞん。海山きうんあうぞや道んのさあ給いざ
つをけまぞくそぞ見給ぞく給ぞりけめと。中くそえて
給りさてを法華の美霊怪ぞのそきひなば。これ初
引給ぞ人りてい。給ぞのぞみてこそ給ぞめと。

すぐ行くよりはしかり行くなり。

## 五

一 薄山僧義心因縁事

ハ法あげまらのうへ。さすがに
名の様ぞ。しがくそえて。奥源くわ入て行り
ちぶ。ぐたぶ行くの細ぬいの。ぬ。ぬ
まかよ。形のごくうう。名行く。産縁やの僧あり。給へ
四十ばかりあるうんと。ん行ぐ。いふ行くの人のな
ぬ行ぬくうはしは何ふらむ。又義の乃縁ゆまい
しきまし。名行りしかん。然ハ見和様国乃ちや。武勇
の家よりて。三人乃秋の事をしうへて。胡縁ゆ。
とぶくべきちうの者ありきぞうのまでも。まま死事

のぶそ行しくえて。ぶりくうとちげめて。産縁すぐ
ちぶりしかも。勿よ世代振ぶずして行ぶ行よ。年
ぶの女なん乃海りふうぐ。縁のもぐ海で。ある切
て山よ義ぶと行り。縁ハ振ぶしゆ事ふ行りし行。
初者ぐもとかく中事れ古行て。人ぶもぶれどぶ一
年ぶふ行ぶりぶ。時ぐ里よ物ぶ行てぐくしぐ
くの命とぶぐふ行り。今又いの乃澄ていくく物ぶのさ
ぶ。ぬれぶぐぶ行ぶ縁ハ用ふ二三ぶんどぶひ行ぶふ
ぶくぐその行ぶ行ぶ。ぶのぶりハ行ぶ浦山ぶえし行り
しうぶ。我ぶもぶ行ぶもに。すぶ。ぶるぐさすぶ。ぶるぐ行りし
ぶば。ぶ。ふふ。ぶ行ぶ。我ぶも来ぶ行ぶ。ぶ。ぶ。

和歌のもりかたくしのあるものいと流し給へ。
又為てをとりかせよかしとてぞくりてくるまていはんへ
ざりまつぐものうくく不見えのいはてゆゑてをとかも定
ずーー波と繋ておはりぬさて歌へ海つさみい花さ
るとぐてうるずぞ給せるべきいらしてはりしをみ思
いざくみ陸奥国はいてくへ久はさのがりさ海よ
見遣りはいはりーーいはりーーーばりーーー

行ゝば。海邊に行てとゝ行りゝん。会い者嵐のかゝ。そ
猫又よ行りゝ人の詞ありゝ。ゝくゝ。ゝとゝ
て。度様ゝ結ゝ。れぞ〻業れ中ゝ。そ業の行
ゝ行ゝ。百年安量ゝ。仏婚を選ゝん。ゝ海ゝり
や行ゝん。行ゝ。ゝ行ゝ。ゝゝ業ゝそ
行ゝゝ行ゝ。

六

浮世住人不知安常酒様世波事

色ゝ。ゝ越後國ゝゝ。ゝ様ゝ云方ゝ海ゝ行ゝ
ゝ。ゝ海ゝ。ゝ。ゝ。

ん狐がうあらうど行くあのの伝乃三郎の渡ぬうらぶ秋
乃田をかのうおてうてうぶよひのうあれまれ。ぶで光ぬ
ぶむのうぶ。僅よ白波のえうぶ。光はのめうふぶうれく。
年ふふくくあけあまでぶんはもーふかうで。出入会仏
の切をあうーでぶや会書れ鬼ふうれ行ぶん書。逆
くふうくぶりむうーくふ忘乃家しきうめくうタ
ぶむのまかりー書ふぶりうきかりー親ふもがくへ
ぶうんとうー年やぶんぶいうて酢をとり送り。
義よにうてぶ乃の煙ふめぐへいむるーくまうき
ふ雲寸とうみ狐よ行で別まーぶるをとうれで。
わうらがうれ秋ぶあうて。僅よ名おと

乃ゆうい歌をるれ白骨うりぶうれで我もはうるれ。
人をあざなう世うりぶうに行りのとうあくぶりぬまと。
うむうされ乃笹の花ぶうふて行よかううあけ糸
ぶうぶかりの身ふうみとのうふまや。海乃武を
ぶうりうん。ぶーうあれぶ行ってうふうさく悲
て。俵の麦ぶふ田乃湯。ぶうくぶはうる乃ぶ花ふぶ行う
ぶうさ。ぶうくふ人男乃まと文くぶ縁遇義はうりあ
ふまでぶ乃まうなう世ぶ十二因縁乃流れ乃環と切れ
ふうの生死乃きぶ行ふくうふうて結へうーさて今
生物義ふてうぶうて悪ふ縁ふとりむきるぶ。信切ま
ふうりがうふうべーぶの苦ぶ戒十善乃力により結

つて。あ[illegible]のちまでもなられけりて。又人界へまゐり給
ふ。い[illegible]の末は沒して。聞はかりのくれ[illegible]時なれば夜
の面[illegible]も。照[illegible]まかりうべし。清水流[illegible]世有よ
おくりるは。生死滅乃舟とよ。[illegible]てこそ又悪縁
るおりもゆさ侍りんずしと。[illegible]生りぬ。六道四生
の間。あそこ爰ふ彼側しどもくみ踏[illegible]してずてを
車れ。在とめぐりふたりずたしこそ流る所ん。
生老病死猿言ふ乃苦は被責てどぐ侍よう賞
世ようぐされめろ悲しもやもおろるり深かくれ
バ流こ流むし世へでうかぐ深も深よ[illegible]ぐ[illegible]むを
流はあらずぞぐからとうへきめぐまり。実にて



しなうへ。

七

新院御墓殯別の事

色ふ仁安の始西[illegible]ろく流行まり侍り
一次り。殯別乃と城の様[illegible]ぐ侍り
き。源山[illegible]のなれ[illegible]ふして。[illegible]りむ[illegible]びて[illegible]未
らぐたく山中れ[illegible]ぐ[illegible]。花の末ど[illegible]よ[illegible]風。
誰とへてうおこ[illegible]ぐ[illegible]ぐ[illegible]
[illegible]ずいふ。長[illegible]ひ[illegible]
乃[illegible]ぐ[illegible]ぐ[illegible]ぐ[illegible]は
[illegible]ぐ[illegible]ぐ[illegible]
[illegible]ぐ[illegible]ぐ[illegible]ぐ[illegible]

とゝぶらひて、と思ひ侍りしかば、とゝぶらひ侍りしに、新院の御墓所にまゐりて、御墓のまへにて、
こゝろのまゝに、なりぬ侍りしに、松の一枝をたゞ手ぶりにて、
ふかくさめ、さまをかへ、墓のまへにて、今更
うきよをすてられて、物をえうしなひぬるかなしさ、
まことぞ、ぞのあり、ひんなり、
よのなかをいとはせ給ひし、百官
翠華のかんだち、あさやうにて、
のこりおほき、ひとりぞ、
あさましき、ものゝふ、
はかなき、月の、
かうべ、

かうべ、とは、
御墓の、
こゝろ、
こゝろ、
の、
さ、
の、
は、
天乃、
まゐ、
ぞ、
かな、

つき給ひたんなれども。陰生命忘して。きべつい行ぼこ
ゆくゝまと。思ひ切てとまりそこりなるさ。仏果菩提の位の
こそで。あゝ〳〵くゆくゝとゆくとかくまもぬ思ひくゝるまに。
泪のひまいでゆくりしくへ。
すしや義貴れ玉乃ゑとてもかゝらん法ハるゆくうハせん
とうるゝゝゝゝくゆくりさ。國裏い今ふけめぬゝぞ
なれいるゝ。ゝ〳〵ゝゝ心ゝゝるゝれめるゝよゆくりさゝゝるゝ
法保元の初の年。林七月の法といゝるゝ乃法皇さ
ゝゝくゝゝゝ也ゝゝゝゝ。天林雲迷て。花の都ゝ
ゝさゝゝゝゝゝて。合戦のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なげさ多のゝゝふのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

京般若野のあこ味よ。亡葬しなりあると。新仮
をうて。死ぬひ実施乃ゐ為ふ。涙おとしなりてこれ
ゐりーにおられ云備を世の事ゐる。誰ゐ知ぶううき世へ
かゐ為ーとんこにあやうくけるき身とりて。
をうりうよのこ作りてむるーく的蓋ゐるく。云事乃
乃思ゐをうまゐ時。形とあおてさけべとも叶ぶーて。
思慮みのこ強めぐり作りんんぶーかゐべー。感
裏とかーく云事をゐるれゐんを生なりとも。佛乃
位見ゐ為とゆんしてまりーばなどう祈へけゐ。貴
呪や魔裏をるゐぐーーきとやこ云事すーやゐるとやだ
だんなんげめて。注事と思祈へどゐを美ゐやうは
生作を。拭を欲を。風をし裏も。ゐ仏のまへ乃ゐ
を求ゐべーー

## 八　約安僧都耳切因縁事

むーー京良の京山階寺に約安僧都と云
人いまそりけゐ。平俊大徳の遺弟ゐすてそ作り者ゐ。
並ぶ比智者ゐすていゐ。ーくぱ乃祈ぶもと施し法へ
つまゐゐ人ゐりこ面の僧坊ゐすゐ作りけゐ。のゐ如
美ゐ方ゐ。字ゐあまりゐ。みくゐ作ゐ師のこゐ。ゐ
始てすかゐ者ゐ。ゐ面ゐ。ゐ法ん人ゐ作ゐ祈乃
ゐもの。ゐのびやゐ。ゐまりゐ。ゐておゐゐ。ぶゐて。約安僧
都ゐ。ゐすけゐ。ゐ作ゐ。ゐ師ゐ。ゐ

なれどやはりとも云ひはすれども是を結ぶ結ぶ
ぶてそこをばりもちそこなはぬ
にるん。新うし後は悪瘡出
のちしさいたりまりてしばし苦痛はいさてうらうら始べ
ちこ結ぶあれよ。当時の結ぶ駿河師ふこ也結ぶ
ば。半分ん重人の方の耳をとれて来れぬくろいや
ろんといふ。でい設七郎の財を出ちとつめうかこ
苦痛やもべうずしやはりまいるの耳ん。
秋耳切てあ父結ぶ事結ぶ
なれ涙ひこらびれてはりけうの結ぶ
のゆまりうて苦ぶ事るれど。ずまびずさんはべうる



事りやはりんずんとぺんの方はぶはりはるとぶ
やて来はりまうとてはりぶぐいなくりと人表
ま見ていりうう陰ぞりんとの結ひられどはりかさ
めれてはりみうふ目をあてらまぶとうる結ぶ事
もるのちなずはりはりぶぶはりぶ事ぶはいぶ
ととてぶみうりとをて方の耳をれてうをはりあ
まぶはと合て涙を流ぶ。はり結ぶうりはりぶ
上人い我身れいれれ事りい。事はりい結ぶはり法師の
約束のこぞはりうう男結ぶりはりかはて又人り
変ぶうくをもうりられはぶ。ぶの道を男捨
て。三悔と云事はぶ澄て。ぞ結ぶ結ぶはりはぶ

もとより寺ぎたて。花のうてなに入給ひしかば。玄賓
の昔の跡ゆゑなく。月を送り日を迎へ
さも語りがほにて何の時のわかれ
語りぬる。其西の方に蓮花の上に坐し給ひ
いづくやらん。僧都のまぼろしの
いづくやらん。蓮は今こそ開けり。
実は蓮の葉にはあらずもけりのかげのさしもの事なり
れしてうさぎの月やうに笑ひ給へ。ち聖を
さぞう給ふ。すべて行てただ
仏をべきなれば。いきるものかは
思儀されば仏のいれかはりぬ
まりへべとかるるくてうりいまは



仏のうるはりうしてゆるくそ
仏もゆくるるこれ昔の
玄賓二義の浦天に結ん
義聖とくくく

ぞうくうこうへさこそ行ひ給ふ。冷泉殿華台院つう殿。
なんとなくそ行ひ給ふ。又さう虎ま方とあさ人給ふ
ひ。昔の月殿あもいぼくうとりて行ひ給べき。ちうれば
うて。大聖そう様をうぐ見こうを法てかう不思議と
つのうり給へるて迷ていうぐくうこうてゆりうんかう
ひ。我身い世ありてさて仏はうをいろめ。高野をを
ふくりんとそもしりうふ。いかもき法師の為ふ事
とそさて。我身い源義しを給へ。ぞうふ事ょまるべ
きるみもす。給ょ波ひりもを出てうをうとうんこ
うるす。筆れを書ぞうれ野ょまるはうぐふのいく
うんうをうてぞうをうんく給るめまふいうふ。

ら。でょ抱代思ふ。身とばうをうされ文。神ひめ
ぞうこの事ぞふ。ぞうれ新あるまで。意地のいを。
給ふ。ぞ。ふうをうを。何事を変みのをうを世中に思ふとをうて外聞
ょ。おうれ。ふうをりはうくとゆへ猫い物めべきうちを
ぞうを。ぞ。ぞ。ぞ

焼こりむ人ぞむしれかりしかりみ
ゆ事とのるんはすまじ事ぞ
ばんとて指をなすむまじ
きうず。勝くぐうて思ひとすぐいくて。志岩り黄
らまこ。雲雲代影目内茅よまこ。
なくて世いづこ小老こて。英麿の庵主
て。世法罪障の衆量あり。音本と被為時
かうんぱらまこ切法ぐ
ゆ。ゆ見ともやべ貴。
ら射らやく燃くこて
よむうぐさあく服ろ
のくらりくこてみ

しく。鄙のるこよ花さくこいぐも。一枝も折て。後世
のあてむ事。義法みちてりこんど。
海麿に事ても物多ろくこて。ぐ。ろ女の
久よかぐこれて。ぐ後よいと富士のあ。にこんく。
浦間のくりあ事ろくこれこいこ月月
すぐてぐいこ花月久ぐ。ぐ。
で行べきぐこても紅梅僧都の。亞聖門ろ。
事と切後切ぐ。流来生命切捨て。三
男丈亀のおよあてぐのくよこぐ。
見えこはてぐまここんとぐりぐ。
ぐ。世事。後の集よぐばこりのを行ーやりん。法冨も

わ[illegible]まりよくて、[illegible]の[illegible]の言葉をいと
し[illegible]なりけりとぞ思ひ給へ侍りける。[illegible]一方ならず感じ給ひ
[illegible]くやうに、[illegible]ましけるぞ、[illegible]深く思ひ給へ
うん世の中は、[illegible]ぞ[illegible]
ざ[illegible]
よ[illegible]ぞ[illegible]僧都の[illegible]
仏道[illegible]二[illegible]
[illegible]

## 九 和僧都事

[illegible]奥猟寺の僧[illegible]和僧都と云人あり。[illegible]
[illegible]

いもを通て、[illegible]
[illegible]
[illegible]

国立公文書館
National Archives of Japan

と云事はなきなり。されば法師と性延と越前へ行て。祝と合せん。法師麿公の後の法師と性延は義操親理とあるなり。帝天乃れは記しあるを見もしらのそらべかりけらく
ふあるべきなり。法師とてはいかに性延。和義操親理とあるなり。帝天乃れは記しあるを見もしらのそらべかりけらく
い其を合とやめてかるふるべきなり。如此文は
情なく。我を捨ていへども。我い法と捨ずして見まで
ちゝひ乃ゆり。去日乃山寺乃僧已よりはまこなりてあ
ぐせ給よあれば。和尚こそ中くこそて。点
ゆりとろふり。拾うさめ乃男源乃毒乃まぐ後
して。村雨とくく秋の野乃ふらしてぐ去かぐ後

乃深衣ずがれりそ〜ゆくんぞあるこそてあられり
ゆり。此事書とく仏と見ゆるふすじ後よ源義て
侍りき。恨いられもうつりゆぬよ。年を経てすぐか
まて。所乃品をてぐ見よ。やもとくも去りつれ後乃
くんぐ乃中へ乃ぐ中くもみくおりあんなぐ法を
反情なく我と捨といへども。我い法を捨すして見まで
乃ゆりとふり。我乃法を捨ずして見まで
の。ぐ後乃ゆりあくどゆくすり。元佛の右よ乃ぐ法をつくし
よへ地獄乃元生まで。多集て浦益を後ゆりき。我
らむ。ゆく。仏乃中へ書世ふ。今乃暁も後ゆ
なく。暁中に生とうまく。ゆ明乃家ふ乃ぐ

はるまとて。はるゝし。淵よりこのかの泡の。流もきゆるつゝて
ゆゝり。和し氏。衣とうそをまわりて。釋迦大師の。弘法の
前。まとをこの。結りんとそ。ぽて。ぽて。ぽて。今も。此の
和と。利と。結ぬ。をすすこにあ。びとて。ぞ。し。か
の。焼れ。風。なんぬ。ぞ。ぞ。り。濱。ふ。れ。法。ぬ。て。ぽ。ら
ぬ。ぞ。ら。ぬ。の。浦。ふ。ゆ。ぬ。り。て。ぽ。ぞ。ぞ。ぞ。ん。よ。そ。こ。ま。を。此
ら。き。ん。へ。わ。し。と。ぞ。い。ぞ。ら。と。そ。て。の。ゆ。べ。き。ふ。浄。出。ふ。ゆ。し。ず
ぽ。ぬ。ゆ。ら。ぞ。ふ。ぞ。ら。し。ぞ。ぞ。れ。ま。ぽ。ど。ん。ぽ。ぞ。ふ。ら。ら。ど。ま。な。
ど。ま。ら。ん。ぬ。に。し。そ。ぞ。今。れ。ゆ。ぞ。ん。ま。ま。て。ぞ。ん。ゆ。
つ。ぞ。ゆ。ま。ま。ぽ。ぞ。し。ら。ぞ。し。き。ま。ま。ま。ら。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
胸。と。こ。ら。す。ま。ま。と。ぽ。し。ぽ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。記。

結ぬ。ん。ぬ。ゆ。ら。ま。ま。ま。て。ゆ。ま。ま。と。ぞ。て。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ぬ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
又一和。ぞ。ぞ。遍。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
松風より。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

十

ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

乃山の中に分け入りて、ずゝ流へ僧ありぬ。
ゝく思ひ下だれたるゝらみゝぞるゝ。淺ましくや
ゝ生ぜりて、髮剃げるんどもそりあはずして、つ
るゝゝ極しゝゝまゝけり。九物るゝもおやくい食ず。
ぶいのなく打しゝあり。時ゝ念仏しゝるんゝて、泪
と思ひ給て、のゝ給ひ、捨すあゝり、ホゝ引なんや
すゝとゝて、ゝ、ゝかゝゝるゝ九ゝゝゝゝ、お捨て念仏を
給へゝるんゝて、山の中に入ゝく産せりしゝゝ。ゝ
せゝりすゝて、ゝ後世へを出ゝんゝ。ゝ分すゝ
つゝあゝゝゝゝゝゝあゝゝゝて式部殿居ゝる
まゝりたゝゝゝゝ分ゝゝくゝゝゝゝゝゝゝ

ゝずゝゝゝゝゝゝゝ

国立公文書館
National Archives of Japan

あらうるこころをみるにおほくはかなくも多くあき
らめさせずして悪作をなすものをあはれと海をなげ
し念仏をすゝめさせ給へりんぜうなくきくはな
ほ法華経又ぶつ法も適悪縁乃ちまことを離て
系ぶつ人罪ふかまれ。釈迦の遺教よりあくまでありて涙
のをとゝぶまして生死乃海をうかべりつゝ
と迴さん道すべう極まりのいとゝしてはうみがくやはな
らんとこゝろ遣し貴くはなり。義三世の結縁なん校
まつ生まれ院の時のと。十ゝ一の心ざしはなりをてまし
とまで思ふ所にまこてずは海乃ちぶまめるぞと
よさてをはれば命乃きえやうでこの下になげる



てゆまそうりもやすんん。今いま浄土よりやまゝ法み
くん。乞孔さのまぶるれ戸ばけ。さして法ぬ法華
すべ必易合ってまりん。新しるきは名乃ことを
のこすぶ事あり。ひつ拙なむ。一浄土のあとおぼす
てあるまことをられさせ給とまり若まさし山へぶで
ら世給ひりにはば法はくはぜう。

十二

播州平野僧俗心事

中法播磨国平野とゝ言所乃山乃ゆゑしゝ海よりて。
うとばるるの彦ゝ結て。初法師はり明義念仏
やてるん法はるぶ武州人初て。義山乃因縁とる法
つくられぶゆまくはりし義るんこうること

るーてーくん。何の有るよ。つりなり若とうけてうつぞくら
むとぞ。ぬくーくそて。母女の後世と。物語りんーしひて。
なぐの作りーとも。捨てくぞ。無し後まれ。
今仏とぐくおてりるくー作ることぞ。作りりるばくんかる
まるさるんぐも。せぐりられぐ。人と妻うて。食拾うくよの
ぐくーくそくぞ。後世としけり。或時仏るーす。比僧里に
いてくぐんくーあるる物ぐとの主い暁法まーし作るべまもぐ。
今くい限り弱面もぐりて後りなりぐ。ぐ。
の妻ら。妻てがくーくそ作るとぐまを妻ようあれぐ。
後ようとーても思いぐりけりふぐまいひーごくーに暁
思くぬーてぐりあやーき雲雲ふくびき常るるーぬ

者いりりみりて。眠まるがぐくーーて。西ふ西てふ
と合て作りりりぐ中後ゆメ。妻ようるくー作り。実
ふま者とるまるなすひ。階老国宅乃妻こ面やうり。
らん世と引りまて。子の中ぐ不法。のりるこれは
門の室とうけらばけぐさをるーぐるくなり。地ふす
まん。母と連ふ。まくーるんと妻ぐ大わふうんぐーや
なりて。後ちんすぐゆくめぐふ寵後くーくめのむめ
まぐも。死て後い人乃門のうてさんぐーめるこまりこ
うりりてぐそのりーんのくーいくまれくてーこ面ぐーよ
後の世ぐ。ぬーぬなるけりと過ぐるふ。ぐ僧乃思入く
勤りんぐ者ふわりりりくーくそて作り。行屋後まーし作

つまめまでぞ[illegible]りける。女ども[illegible]
遊び[illegible]山者ばかりぞ。[illegible]
こそ。分のいとづゝみのうちめりまで。思人乃至て[illegible]
の苦しみと歎ざんと。[illegible]
ぞ。[illegible]への人すてうばるゝん。[illegible]
むどぞ。[illegible]
[illegible]。[illegible]
きゆすでぞ[illegible]。

十三

花林院永玄僧正事

さの国法師大納言經信乃四上と云山里にとゞまり結
ける長月の下旬ち張の[illegible]

て。齢六十ゐ傾くまでの[illegible]。実よ賢くやんごと
なき僧乃入まく[illegible]。[illegible]
ぬまで。[illegible]
納言ぞ[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]
人乃[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]

そもいつまゝみのゝがりて侍りしが。出世の業をやゝ
侍りたん。年のまゝ都めぐりをはしてゝ。さてはしば
しく侍りて。猶ゝ思ひ立ちをはせ。諸国の山々をたづ
ね侍りしに。ある時。山の中に。美しき女と行きあひて侍り
しが。その女。ものいみさまの姿にて。人の気配とは
ひ侍りしかば。すなはち。我は女人の身にて侍りしが。
ひとへに。菩提を求めんがために。かくのごとくに
なりて。諸国をめぐりて侍りしが。世のはかなさを
思ひ知りそめしよりこのかた。一寺を建てゝ
ありがたき人をもとめ。ひとへに。菩提を求
むとの願ひにて侍りしが。

どうれうき事ふかき侍りしかば。さて大納言
を始め入道をはじめ。ゆかりやとゝさまの事をおもひ
出でゝ。ひたすら僧になりて。月日をおくる一首の歌
と書きすてけり。

うゝやけの雲の山のみちびきしたのみちをば行きぬ
と書きてゝ。ゆくへをしらずぞ。なりにける。
言葉無為の方便。世の人の大納
言殿。秘蔵の宮。四方に尋ねさせ給へ
ども。行方知らず。林隆永玄僧正と云人。年ごろ遍
照の御弟子にて。なほ。寺をとゝ。
てゝ。いかにもあるべきの。
比叡の山にかくれ。

物語ふ〳〵はべりしとぞ。いとうたてあり。ひがの
ゆゑおぼしめされもやとぞ。ぶりちらばし流涙し給へり。
まして。玄賞僧都さぞ。後世をいとなむらん。
つまさ面影もくめづらずとて。大納言も涙堪ねまでぞ
ぬれ給へりける。ことはりなり。物もおぼえず
悲く侍りしかば。山の流とともあて物さ
ぞ。ぶ〳〵さ者が迎代まんずまぬまさりよ給へ
ばしかばかりなりけるとぞいふ。衣の色いむしれ
の京人の時。僧は侍ぬ。玄賞の首の侍よ。
多世代遁て人の中おぼ。山田の僧都のいみ
をはやすもいのすて侍りしぞ。今は僧

乃ゆゑ面ぞでこそかさ思ふ。ありかく我
侍るなり。凡人乃世代者まで。首とはいひ
も。名をば埋まじと思ふ。ことふまさりて
ありて。幸を離ることはれぬ。侍りとのぶれん。
いはば思ひまてかくるく。ことはり。
とよ。実代侍ぬ。世代乃文
侍ぬ。ぶ〳〵ぬ。ぶ〳〵ぬ。
代のぶ人ぞ。ぶ〳〵ぬ。
ぶ物と思ひ。ぶ〳〵ぬ。
いぶ。ぶ〳〵ぬ。
をゆん。ぶ〳〵ぬ。

しずゝ海よ海なゝり世をもなしべくくそゝあ
らまくくて身はちくそゝいくゝ作をはくりし
法華くゝあくと誦まりて面白くさ
百く佛個くゝ作りくゝが。持斎て身はうまへをうくれ
作くゝべかくて一紙とるくゝ本をんも罪源くゝと芝
侍る。況や義の男国あくて門もくゝ作ざくゝ
なんん人の門すくゝ門もすまで作べきよくれ自山雪
撰りて。老尊の毒のくゝきぶ風はなびさやとく。
作聖の野名の門面のすきそゝあたく国の末
新の義の風より乱てたくゝ作ゝ本尊は紙稿。
作聖の高稿くゝ作りくゝ作をくゝ作べ業経

うり。遠嶽の国のきたもくゝ移くゝ山のう
す紅葉。ゝくゝが〳〵濱より名れ法くゝ作るゝこが
ぬ富士のみるとい時くゝらぬのゝ時ぬ雪のくり。
海潮の景清見ん国。大磯小いそのの海くゝ作
ゝそやは僧ゝいたゝ十ゝ傾きゝ法ゝ作ゝ本尊
又いまそかくんも門そやくゝ作くんさて門くゝ本
よ思る澄くゝ作すくん。遠く廣ゝ作り。紙は身を
思捨ゝいの御くゝ作くゝもくゝ作ゝ紙くゝ作くゝ作。

十三

雲林院説法国義心男平一

中法華の系よゝくゝ作くゝ作者の男女
ありくゝ作くゝ作くゝ作るの人なくゝ作べくゝ作は男ゝ作ゝ何。雲

林院乃祝詞の作りなり。神代のおもかげを諸
てくり道の仰のひとつなり。月夜の月夜はと説給ふ。
人くをよろこばしむくりぱ男はいとくいとをあはせ
家をを治ずして。自然中なる中山乃奥より
いりかさばり造と。静は金仏しゆし里ふ物代
るんこと儀物とをはなり。それと用て又里より
過ぬりさをなりけるを。秋かるず里を過ぬ
金仏しゆりされば来ものこと物を乃家すん義と
情とう者ずと言来るし。或時人乃為作てゆふ分
のくりしたよ。夜いりき給ふゆうい物も給ふてつ
を給ふい給ふどやといひくれぬそ事ふ作り。登い

何とかなくさろていなすろ女うんどとを作ふ。秋なく
みくりしくもの思ふ物作りゆ。ちるる物代
見るるすれふり撫物しの面うげは言てゆうゆも乳
ぬ色く作り。秋はさるれ津りるてゆ乃すこられ
で過ぬり。過ぬとしてを出発五者れ思られてゆ物を
せくを涙作をいりさ作ろりさてみものげう
耳ふりをして。義とやメそふりゆ。金酒物とも
金仏ともし作ろ人あ。ゆそれとるん他と物を家
ゆくせんとゆろ作りゆ。それとやそれが為事ふ
人を神とたりて祭ひくさりふろりさてこ年
汁酒て振よ。三日まて里ふとおど作ゆいぶ世ふ。

人々西ゐりて行あまに。西ゐり向てもいと合てうんいとさ
ゑゐゐり。清猶くかるゐ。くゐそて。ゐそざさ人にゐまなど
して。まりゐざゐ行けりとなん。ゐゐかりがさりけり
ゐまりゐ。ゐまるゐ人ゐゐゐゐも情のすくるして。お物語さ
ゐ来れいと思て。後の世の罪をばけるるるるゐ思
いざるゐるゐ。続けりゐよりのいよるそて。さばり分は
かゐて。ゐそるく遊さ書しあゐふり捨く。つ後ゐ人ず
ゐりけん。ゐゐ書くゐ行りゐ。書ハかりゐゐ付て
ゐゐの勅こさめべくゐゐゐるとしていく。里ゐをおざり
ゐる来。思とり行ゐいゐ中ゐゐまていくゐかこと
く行りさて出発者のありそれていても移まど

行りゐん。分ゐりて貴で。ゐ行る。世を捨る人ゐゐ
まそゐれども。眠ハすてぐく行るゐ。ゐ習ゐるあやしの
いのゐ程ゐ行ゐん来れあゐかゐさゐ海ゐかゐなく行り。
遊ゐるゐ明かりしゐ人ゐるいなす。猶ゐ世ゐゐ捨
ゐ類。ゐゐ白骨ゐゐ。ゐと詠ゐ交ゐゐ。ゐゐゐ春海
し。行ゐゐまゐゐ。ゐゐ風ゐれゐゐれゐく。行
かゐなくゐゐめる世の中ゐゐゐゐ出ていく
らゐ紙分ゐ行ゐ年月ゐ。ゐ白ゐ。ゐゐゐゐ
て。長月の夜の。ゐゐ。ゐゐゐゐ。行
ゐくゐりそんとする来ゐゐ思ゐゐいゐゐ海ゐ
ゐて。秋の長夜すぐゐゐ来ゐなく移りてゐ

るに髪とのこりなくてぴるりとぬけぬ。あまを
いうれまぎなく人へ。されば若導わ高い郎燃仏構
ぐ。ぐくめせてとすれば。恵心僧都いかうこを眠と志
のごとく侍り。今は僧のあさうをこそられ書よ叶
て侍ま。漆瘡や豊瘡といへども。いかられと捨ぶ被
い湯あまでも。いかてまよ物はして。ぞいうこちづへり
て。万物いさぎ。ふるしてぬる事よ。ちろあれどん
の所とるるも。ぬと所と所事るれと。仏を
とへ給ろ見るべしらふくあ湯のすぐ侍り
きろふ侍り。

## 十四

惠大師白骨首女人授法花事

るとあり。法華奥国。郡。柳と云里ぬ。たぐ
し侍りし時。ちりのうちに見侍りしぬ。ちぐ山
と云山あり。あり。ぬ。ちろ極。岩の姿。水れ流ろ
やう。給ふ。ちるも筆にのぶ。ぬ。ぬ。ぬ

時天井のうへおもありてうぶなんぢ強と求て前
ふとゝ。紙こゝおのてとゝ〜んとゆゆ。あゝ〜ゝ思
ゐ〜。強と。ぬて前は。重ゐ。天井のうとて。拍
拍〜き却うてをゝ〜ゐ。八日と云に皆智ゐ
ぬ。時は嶮ゆゐ。ゐ。ぬ〜ゐ。ぬゆ〜〜ゐて。
天井と見ゐ。ゐ。ぬ〜され前ひゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。

行てまこさんたくくもじ書とものを欲おもれりそんぞまこ
中れ書きさいぞさなれ筆書みをけてがくくれりぞ思
れだくそ。慈恵大師の白骨と彩て。接続書めて。
系ありとろこうの昔しそまげしき異れ孫代
えしまこうしてだりの歌代りりつみていげくれ者
もなくてぞんめしれ女乃未て書とりて一部一
授とりて後ぞん親者しく彩て。実行ありきく。秦乃
嘱記ま載て代まとぞ思おされくくり迷て書くれり。
みと代ぞんれりたりしなまこ代まで。世下ていぎり
りしそあまきさりぞみ海入くく思澄て代ぞん。行ふ
海山変代りぞ今まいげまの浄ちみりまれめんと。

迷て、家妻代りしやくまて代りぞや。新ふ海しの
ふ家とおくく。衣い深めまいぞ。りくくき信ぶ毒
さず。源よ思と海す書をなくて。年れいさげくふ
ありめりぞず。代ま思く代ぞさてを又慈恵大師の。
をしふ乃代法希なり嘱笠山ま法代垂て。仏也
男乃前生と涙しぞりんとみや。法乃新代書こ西
ふなりぞ思めと行動るくぬいぞまて。教生聞諦の。
感なりぞまとて代り思さまぞ。少代てもぞふく
てうむべさ。前生まとそこてで。代ぞ代ま欲うくく代
てるぞくく世女。名字も書ま流を
乃なぞ年月を動ぞくく代りしかぞ。代まのくかふ

知ぬる人なくして。詠ぬる及ばるゝもの。此事をうらむる事。
をのゝ下の情をもつて。此金面の前に不思議をもて。
怪しの不思議なり。義をもつて。なんぞ云人もなくして
やはんと。為合まゝ〳〵なり。

撰集抄第一終

国立公文書館
National Archives of Japan